一宮西高新聞

発行所
愛知県立一宮西高新聞部
一宮市萩原町串作河田1
電話一宮（68）１１９１
株式会社　大東社
電話一宮（62）１１６８

教科書・補助教材・一般書籍・雑誌
文具・事務用品・家具・教材
松清本店
稲沢市高御堂1-2-1
電話 0587-32-0048
FAX 0587-21-7419

島文楽

僕は今、一宮市の西佐千原という地域に住んでいます。僕が、通っていた葉栗小学校や葉栗中学校には、たびたび島文楽保存会の方が島文楽を伝えるためにいらっしゃっていました。その公演を見て僕はとても感動したので、今回島文楽の記事を書くことによって島文楽の魅力をみなさんに伝えることができたらと思います。

島文楽の人形

一　文楽とは

初めに、文楽とは何かという疑問を抱く人も多いのではないでしょうか。ここで島文楽を紹介する前に文楽について簡単に紹介したいと思います。

文楽とは、義太夫節（江戸時代に大阪で成立した浄瑠璃の一派）の語りで演じる人形芝居です。観客は、太夫と三味線が語り出す情景や人物の言葉・心理を耳で聞きながら、三人の人形遣いが違う人形の姿・表情・動きを演じるのを目で見て楽しみます。そこには、人間の演じる劇とは違う、人形による人間ドラマが展開されています。

①　太夫と三味線

義太夫は原則として、一人の太夫が三味線を伴奏にしてすべての役を語り分けるもので、老若男女あらゆる人物の年齢・性格・心理・境遇そしてその場の季節や情景や時間までも表現します。

②　人形遣いと仕掛け

文楽人形の最大の特色は『三人遣い』です。頭と右手を遣うのが『主遣い』、左手を遣うのが『左手遣い』、足を担当するのが『足遣い』で、この三体が一体となって一つの人形を操ります。

二　島文楽とは

次に島文楽についての紹介をしていきたいと思います。島文楽と文楽、何が違うのかという疑問を抱いた人も少なからずいらっしゃるのではないでしょうか。島文楽と文楽の違いは、個人の有志によって始められたものか、神社の祭礼のために始められたものかの違いです。簡単に言うと、島文楽は文楽をやりたいという人たちが集まってできたのだが、普通の文楽は大体が神社のために行うものとしてできたのです。

ここで、島文楽と文楽の違いを皆さんにわかっていただいたところで島文楽の歴史について詳しく紹介していきたいと思います。島文楽は、人形浄瑠璃とか単に人形芝居、あるいは『島デコ』の愛称で人々に親しまれてきました。もとをただすと織田信長が安土城新築祝い（一五七六年）の時に渡辺弥四郎が操ったものと言い伝えられ、その子孫が岐阜県泉山県郡村（現岐阜市芥見）に住んで、代々郷土の人形師としてその芸と人形を伝えてきたといわれています。慶応三年（一八六七年）弥四郎から十四世の子孫渡辺常助の代になり、この人形を葉栗郡大毛村（現一宮市大字大毛）の野々垣右ェ門・梶浦雄三郎などに金七両で売り渡しました。大毛では若者の間に親しまれその若者たちが人形芝居に夢中になって農事を顧みないので、親たちが腹を立て二～三年後には島村（大毛村の隣村）の若者彦坂嘉左ェ門、森嘉助、岡本藤右ェ門などに譲ってしまいました。それ以降島村の若者に引き継がれ今日に至り現在島文楽と呼ばれるようになりました。

（出典　島文楽保存会のパンフレット）

三　島文楽の保存会の方々が演じてきた外題

昭和二十七年以降に島文楽保存会の方々が演じてきた外題について紹介したいと思います。

壺坂霊験記　……三四回
阿波の鳴門　巡礼歌の段　……三八回
絵本太功記　十段目　……三四回
伽羅先代萩　正岡忠義の段　……三三回
神霊矢口の渡し　……二五回
朝顔日記　宿屋の段　……一六回
三勝半七　酒屋の段　……一五回
三番叟　……一〇回
その他　……二三回

この中で最も代表的な外題は『阿波の鳴門　巡礼歌の段』です。この外題はどういう内容かといいますと、十郎兵衛・お弓の夫婦は、徳島の玉木家の家宝国次の刀を探すため、大阪の玉造に住み、十郎兵衛は名前も銀十郎と変え盗賊の仲間に入っていました。お弓が留守番をしているところに手紙が届きました。十郎兵衛らの悪事が露見し、追手がかかったので、早く立ち退くようにとの知らせでした。お弓は夫の無事と刀の発見を祈って神仏に願をかけているところに、巡礼の娘が訪れます。国許に残してきた自分の娘と同じ年頃なので、話を聞いてみると両親を探して徳島からはるばる旅をしてきたという身の上を語ります。両親の名前を聞いてみると間違えなく自分の娘であることがわかりました。今すぐに抱きしめ母と名乗りたい思いを抑え、盗賊の罪が娘に及ぶことを恐れて、国へ帰るように諭す。そしてこのままここにおいて欲しいと頼むおつるを、お弓は泣く泣く追い返します。おつるの歌う巡礼歌が遠のくと、お弓はこらえきれずに泣き崩れるのでした。しかし、このまま別れてはもう会えないと思い直し、急いでおつるの後を追います・・・僕が言えるのもここまでラストは是非、島文楽の公演を見に行っていただいて楽しんでください。

人形の顔

（出典　淡路人形座ホームページより）

四　インタビューコーナー

僕は、今回この記事を書かせていただくにあたって島文楽の保存会の方々にインタビューをさせていただいたので、ここで紹介したいと思います。皆さんがこの記事を読んで抱いていた疑問がここで明らかになるかもしれませんよ。

（Q） 活動人数は何人ですか？

（A） 最年少が十三歳、最年長が九十歳という幅広い年代の十八名によって構成されています。

（Q） 人形一体の価格は？

（A） 一宮市の文化財に登録されているので価値は計れませんが、一から新しいものを作ろうとすると軽自動車一台分くらいの価格になると思います。

（豆知識） 島文楽の人形に使われているばねは、鯨の下あごのひげであるため捕鯨が禁止されている現在では入手が困難だそうです。また、人形を直すことのできる職人の方もだんだん少なくなってきているためその点に関しても厳しいそうです。

（Q） 公演を行う中で心掛けていることは何ですか？

（A） 練習を行うことによって見つけた問題点に注意して本番では改善できるようにし、まるで本物の人間が劇を演じているかのようにお客様に観ていただけるようにしています。

（豆知識） 記事の冒頭の文楽についての紹介でも述べたように、文楽では人形一体に対して人が三人ついて操作しています（三人遣い）。なぜこのようなことをするのかというと、人が三人いると人形の関節をより滑らかに動かすことができるようになり、より人間に近い動きを再現できるようになるからです。また、遣い手の人間だけでなく人形のほうにも様々な仕掛けがあります。一つ例を挙げるなら、人形の口に小さな針がついており泣くシーンなどではその針に手に持たせたハンカチをひっかけ、より人間らしさを演出しているそうです。

（Q） 人形の点検の頻度はどのくらいですか。

（A） 毎年八月の第一日曜日に、人形の髪を結い、虫干しと言って虫が人形の着物を食わないように干すという作業をしています。また、壊れた人形を修理したい場合は大阪まで行かなくてはならないそうです。

五　まとめ

僕らが暮らしている令和という時代は激動の時代です。生活様式が変わっていき、様々な文化が入り乱れどんどん変化しています。その変化に対応していくことはとても大切です。しかし、今回紹介した島文楽のように昔から変わらずに受け継がれてきた日本固有の文化を守っていくこともそれと同じくらい大切だと思います。つまり、変化していくばかりではなく、変わらず守り続けなければならないものもあるということです。来年の二〇二一年には東京オリンピックが開催される予定です。その頃までには、新型コロナウイルスが落ち着いてくれることを願うばかりですが、こうした催し物があると外国の方も大勢日本に来られます。そうした時に、外国の方に日本にはこういう文化があるのですよと自分から発信できるくらい自分の住んでいる地域の伝統文化について学んでみてはどうでしょうか。そうすれば、伝統文化も様々な人に語り継がれていき守られていくことに繋がっていくのではないでしょうか。

（小島）

論説

コロナ禍で生まれたもの

新型コロナウイルスの影響で外出自粛が要請されてから数ヶ月が経ち、今度は疲弊した景気経済を再興させるため「Go To キャンペーン」により外出することが推奨されるようになった。その中のキャンペーンの一つである「Go To Eat」は、経済的に大きな打撃を受けた飲食店を救おうとするものだ。コロナで多くの店の経営が苦しくなった中での大胆なキャンペーンだ。そのおかげもあってか、日本の経済は、だいぶ元に戻ってきたように思われる。そのような中で、私は少し前に驚くべきニュースを見た。それはある飲食店で起こったことで、その店の利用客は千円より少ない食事しかしていないにもかかわらず、キャンペーンにより千円分のポイントが付与されたというものだ。わかりやすく言うと、八百円の食事をすると千円分のポイントが付与され、二百円〝儲かる〟ということだ。本来「Go To Eat」は、外で食事した際の支払いを軽減させ、飲食店での食事を促進させるためのものだ。しかし、このようなことが起こった結果、敢えて千円以下の食事を注文することでお金を〝儲けよう〟とする人が出てしまったという。気持ちは分からないでもないが、本来の目的を考えずに自分の利益ばかりを優先させるのはどうかと思った。現在では、付与額以下の食事をした場合は、キャンペーンの対象外とされることで問題は解決した。コロナ禍で多くの人が苦しい中、自分の事でなく周りの事も考えて協力し合いたい。

また最近、コロナの影響もあってか、テレビやYouTubeでよく見かけるようになったCMがある。某有名芸人が軽快なステップと共に宣伝歌を歌う「出前館」だ。コロナ禍の中でCMの反響もあり、出前の注文は以前と比べて何倍にも増えているという。出前と「Go To Eat」。ある意味、正反対の物が同時に流行っているという不思議な状態にあると思えるが、どちらもコロナで影響を受けた飲食店を救うことができるという大きな共通点がある。私の家庭では、対応している飲食店の種類の多さ、出前のスピード、料理のクオリティー、そして何よりも楽であるということから「出前館」を何度か利用している。そして、「Uber Eats」。こちらも最近よくCMを見かける。「さて、今夜私がいただくのは、……」というやつだ。

「出前館」は大手チェーン店や宅配ピザ店などのデリバリー専門店を中心として店舗が登録されているのに対して、「Uber Eats」は大手チェーン店の他に、今までデリバリーを行っていなかった個人経営の飲食店も登録している。また「Uber Eats」は「出前館」とは違い、飲食店に注文した料理はその店の配達係の人ではなく「Uber Eats」に登録している配達パートナーによって受け取られ、私たちのもとへ届けられる。「Uber Eats」の登録に面接などは無く、簡単な条件さえ満たせばウェブ上のみで誰でも登録できる。そのため、どのような人が配達に来るのか、どのような状態で料理が届くのか、など不安要素があった。しかし実際に利用してみると、スマホのGPS機能を使って、今配達員がどこにいるのかが分かり、顔写真も掲載されていたため、安心して受け取ることができた。届いた料理も丁寧に専用のあのバッグに入れられ、汚れやこぼれもなく完璧な状態で届き、配達スピードもとても速かったため、また利用したいと思った。

コロナの影響で様々なことが制限され、不便になるばかりだと思う人もいるかもしれない。しかし、よく周りを見てみれば、その影響で急速に発展したものも多くある。それらを上手く活用し、社会全体として協力していくことが、コロナ収束に向けての近道なのではないかと私は思う。

（堀井）

動物に対する態度

今回は、十年くらい前から社会問題として取り上げられてきた動物の殺処分問題に関して書いていきたいと思う。僕がこのことに関心を持ったきっかけは動物殺傷ゼロを掲げる「BREMEN」という団体を知ったことであった。この団体は、アーティストの「SEKAI NO OWARI」が立ち上げたものであり、グッズの売り上げから必要経費を取り除いた収益全額が殺処分ゼロのために使われるという。実際に僕も少しでも力になれたらと思って、そのグッズを買った。有名なアーティストがこうやって行動を起こすほど殺処分は社会問題となっている。僕は今回の記事を通して現在の状況を皆さんにも知ってもらい関心を持ってもらいたい。

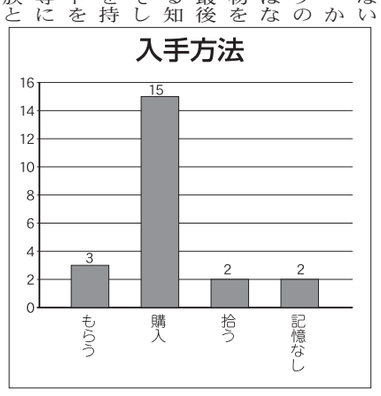
その前提として西高生の殺処分についての意識を確認するために二年四組、五組の二クラスにアンケート調査を行い、六十八人から回答を得た。五項目のうち、気になった一、二について述べる。また、その他三項目については以下にグラフで示す。

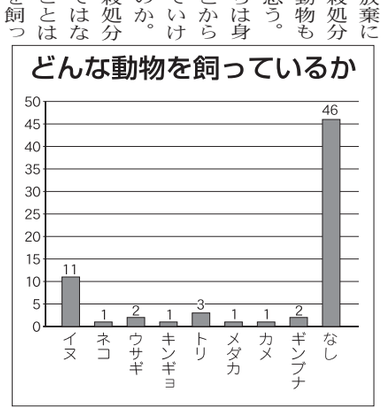
一、日本で毎年何頭の犬猫を含む動物が殺処分されていると思うか。アンケートによると、平成三十年度に実際に殺処分されたのは約四万頭とあるので、実際の殺処分数はアンケート結果の半分ということになる。しかも年々その数は減少傾向にあるという。しかし、殺された犬猫のうち、犬は約四千頭、猫は約一万五千頭が飼い主から引き取ったものだそうだ。殺処分数が減っているのはよいことだと思うが、飼い主から引き取って殺処分された犬猫が約一万九千頭いるということは問題ではないだろうか。

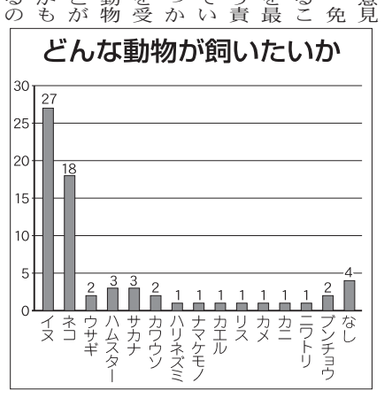
二、殺処分を減らすにはどうしたらいいと思うか。アンケートでは「必要以上のペットを飼わない」、「保護された動物を引き渡す機会を増やす」、「飼育放棄等を防ぐために、罰則つきで免許制にする」、「去勢する」といった様々な意見が見られた。二つ目の「保護された動物を引き渡す機会を増やす」という意見は実際に日本でも行われていて、里親を募集したり、譲渡会を増やすなどをしているようだ。それで救われた犬猫も増加傾向にある。三つ目の「飼育放棄等を防ぐために、罰則つきで免許制にする」という意見は免許制ではないが、ドイツでは飼育放棄を防ぐために罰則が設けられていると聞く。ドイツでは日本と比べてペットを人間（家族の一員）とみなしている人も多い。例えばドイツでは電車やバスなどの交通機関も一緒に乗ることができるそうだが、日本ではこんなことはできない。僕は、この意見に賛成で、免許制にすることで動物を最後まで飼う責任をもっている人がしっかりと講習を受けた上で動物を飼うことができ、しかも罰則もあるので飼育放棄によって殺処分される動物も減ると思う。

僕たちは身近なことから何をしていけばいいのか。動物の殺処分があってはならないことはペットを飼ったことがない僕でもわかる。ドイツのようにではないが、動物を飼う時、最後まで飼える知識、財源そして責任感を持ち、ペットを人間と同等に扱い、家族として大切に最後まで生活していくこと。このような心掛けが動物殺処分ゼロを達成する最善策なのではないかと思う。皆さんも一度動物に対する見方を変えてみませんか。

（石原）







作

私は、よく帰り道に写真を撮る。きっかけは友人が写真を撮っているところを見て楽しそうだと思ったことだ。コツコツとそれを続けている現在、大量の写真が容量を圧迫し始めているため、携帯の動きが遅くなりつつある。写真の被写体は、ふと目に入った花や自転車にくっついていた虫、飛んできたカラスなど、様々である。しかし、その中でも圧倒的に多いのは月である。

月とは不思議なもので、古来より日本人の心を惹き付けてやまない。藤原道長が「望月の欠けたることもなしと思へば」と詠んだのをはじめ沢山の歌が残っているし、日本最古の物語と言われている『竹取物語』においても月は重要な役割を果たしている。最近では『鬼滅の刃』にも登場しているようである。

なぜ月はここまで私たちを魅了するのだろうか。これはあくまでも憶測だが、人々は日々姿を変えていく月に、常が存在しない「諸行無常」の人の世を重ね、そこに親近感を感じているのではないだろうか。三日月から半月、半月から満月へと変化してゆく月には、確かに常に動いていく世の中に通じるものがある。月が昇り、沈んでいくさまもそれを思い起こさせる。

もっとも、実際に月を眺めるとき私はそこまで深くは考えていない。ただ夜空に浮かぶ月を見て「綺麗だな」と思い、携帯で撮影する、それだけで私は一日の疲れが少し取れる。これを繰り返すうちにいつの間にか、月が出ている日は必ず写真を撮るようになっていた。

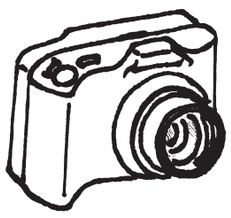
最後に撮影した月の写真の楽しみ方を紹介する。私が特に勧めるのは、写真を日付順に並べることだ。そうすると月の満ち欠けを再現することができるのだ。ある程度写真が溜まったらやってみてほしい。また、上手く取れた写真を友人と共有してみるのも中々面白い。

この記事を目にしたあなたも今夜、月を眺めてほしい。千年以上前から変わらず日本人の心を惹き付けてきた月は、現代でも私たちを魅了している。古来の日本人の感性は今も尚、私たちの中で生き続けているのだ。

（池田）

計量器・ＯＡ機器
事務・学用品・書籍
紙徳商店
一宮市萩原町萩原
TEL 68－0034
69－4121
FAX 69－2466

Sports Uniform
Bag / Luggage
企画・製造販売
株式会社　水野繊維
http://msmizuno.jp
〒454-0004
名古屋市中川区西日置二丁目15番17号
TEL（052）331－3077
FAX（052）331－3127
E-mail　info@msmizuno.jp



～一瞬を永遠に～
稲沢市祖父江町
石田写真館
0587-97-0059

お昼休みに
手作りパンの販売をしています。
ふれあいサロン さんさんガーデン
さん・さんギャロップ
一宮市萩原町中島字番所48-1番地
☎0586-69-3388

作ろう！NO濃密な思い出
発揮しよう！個々五五の能力と団結力

九月一日火曜日、待ちに待った体育祭が幕を開けました。今年のスローガンは、「作ろうNO（濃）密な思い出　発揮しよう個々（五五）の能力と団結力」です。今年は新型コロナウイルスの影響で各部門大変なところが多かったように見えましたが、日がたつにつれて、みんなのやる気が高まっていったように感じました。

開会式前、グラウンドに出ると目に飛び込んできたのは、各群団を象徴するマスコット。第Ⅰ群団「星のカービィ」よりカービィ（ピンク）、第Ⅱ群団「スポンジボブ」よりスポンジボブ（黄）、第Ⅲ群団「デッドプール」よりデッドプール（ウェイド・ウィルソン）（赤）、第Ⅳ群団「アラジン」よりジーニー（青）、第Ⅴ群団「ポケットモンスター」よりヒトカゲ（オレンジ）、第Ⅵ群団「スーパーマリオブラザーズ」よりヨッシー（緑）、第Ⅶ群団「トイストーリー3」よりロッソ（紫）、第Ⅷ群団「一〇一匹わんちゃん」よりポンゴ（白）。マスコットには、各群団の苦労と期待が詰まっているように感じました。

体育祭の最初は開会式ですが、ラジオ体操の途中で雷が鳴り、一時中断して教室待機になりました。その影響で、一日目の競技を一部二日目に移し、部活動対抗リレーは中止になってしまいました。再開後、最初の競技である綱引きは予選から白熱した戦いになりました。そして体育祭の目玉の一つであるリーダーによる応援合戦。どの群団のパフォーマンスもとても完成度が高く、さらには各群団の手作り衣装が華を添え、全員がとても輝いているように見えました。この圧巻のパフォーマンスで一日目は終わりました。

そして迎えた二日目、障害物リレーでは、輪投げの輪が全然入らなかったり、ハードルが持ち去られたり、ボールキャリーでは、借り物競争で該当者がいない文字を引いたり、豪快に転ぶ人がいたりと様々なハプニングがありましたが、みんな全力で、とても楽しそうでした。そして応援合戦と並ぶ体育祭の目玉、群団対抗リレーが始まりました。二日間に及ぶ体育祭の最後の競技ということもあり、生徒のボルテージもマックスになり、応援にも熱が入ります。「頑張れ！」「いけ！」選手と観客が一体となり、とても白熱したレースとなりました。全員のテンションが最高潮の中、リレーが終わりを迎えたとき、突然各群団の群団長とリーダー長が集結し、ダンス！ダンス！リレー以上の盛り上がり！みんなのテンションは三〇〇％で二日目は終わりました。

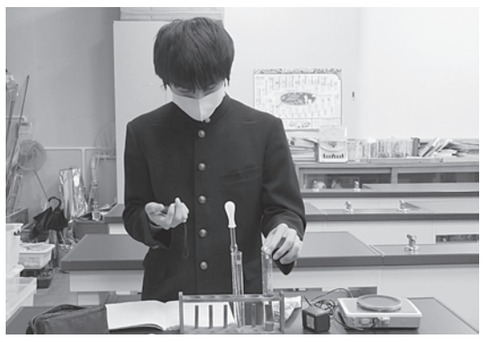
五五年の歴史の中で一番と言っていいほどいろんなことがあった今回の体育祭。文化祭と部活動対抗リレーがなくなり、多くの人が悲しんだことでしょう。ですが、濃密な思い出ができたことに変わりありません。次の日、それぞれの順位が発表されて今年の熱い、暑い体育祭は幕を閉じました。（山田）

部活動紹介

突然ですが皆さんは所属している以外の部がどのような活動をしているかご存知ですか。部活動によっては知る機会が無いと思います。そこで、新聞部は皆さんに西高の部活動についてもっと知ってもらうために特集しようと思います。今回は自然科学部と新聞部について特集します。

○自然科学部

自然科学部は、火曜日と木曜日の週に二回、生物室で活動しています。部員は六人と少ないですが、理系・文系関わらず、実験や物事を追求することが好きな生徒ばかりです。



活動内容

主な活動内容は、やはり実験です。それぞれやりたい実験をグループを作って行っています。例えば、普通の物質なら水に溶かし冷やすと結晶が出てきますが、冷やしても結晶が出て来ず、衝撃などで結晶が出てくる酢酸ナトリウムという物質を使って実験しているグループがあります。そのグループは酢酸ナトリウムが結晶になるときに発生する熱をどのぐらい保つことができるかを実験しています。また、別のグループでは、片栗粉と水を等量混ぜた液体に力を加えると固体になるダイラタンシー現象について調べています。水以外の液体でも現象が起こるのかも実験しています。

大会は？

大会はありません。しかし、西高祭や「高文連自然科学専門部研究発表会」という場でグループで行った実験の成果を発表する機会があります。自分達の実験について発表することで実験について理解をより深め、気付かなかった疑問点を知ることができます。

終わりに

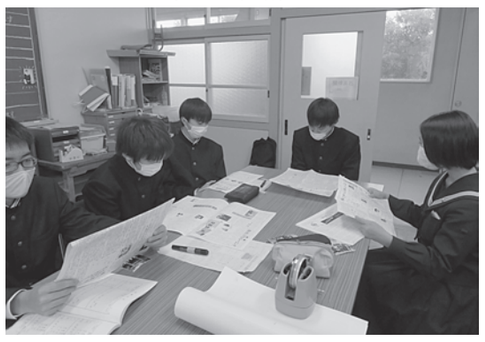
どうでしたか。皆さんが他の部活動を知る機会になれたなら、幸いです。（大竹）

○新聞部

こんにちは、一宮西高校新聞部です。今回は、部活動紹介ということで、普段僕たちがどのようなことをしているのかを紹介します。そのために、部活動を行った十月二十一日と十一月十一日の僕たちの様子を記録しました。どうぞご覧下さい。

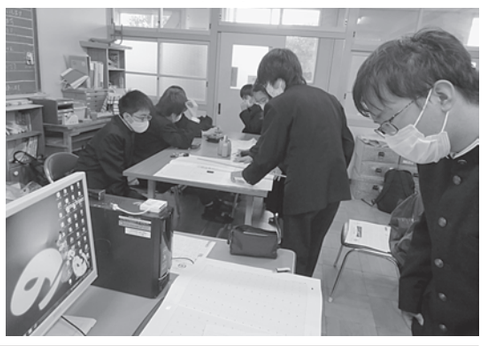
【十月二十一日】

部活動の中でよく行う、新聞評論というものについて紹介します。部員の各々が自分の興味を持った記事を読んで、その後記事の内容をまとめ、自分の意見、感想などを顧問の先生と部員たちで共有し合う、というものです。この日も様々な記事についての意見を聞くことができました（左の写真は部員が発表している様子を撮った写真です）。今流行のコロナウイルスの記事や政治の記事、スポーツの記事など選ぶ記事は部員によって様々です。この活動によって僕たちはいろんな情報を手に入れることができ、また、人前で自分の意見をまとめ、発表することに慣れるといったメリットがあります。



【十一月十一日】

下の写真は僕たちが毎学期発行する新聞、「西高新聞」についての構成を考えているところを撮影した写真です。僕たち部員は、一からどんな記事を載せるのか、どんな構成にするのかを考えます。大変な事ですが、皆自分の記事をたくさんの人に読んでもらおうと、一生懸命頑張っています。



さて、この西高新聞ですが、次に発行する（今製作中）西高新聞は第百六十三号、つまりこれまでに百六十二部の西高新聞が発行されていることになります。生徒の数を千人ほどとすると今までに千×百六十二部の西高新聞が刷られていることになります。その数なんと十六万二千部！（すごい数ですね。これだけの数が発行された西高新聞は当然長い歴史を持ち、また、西高の歴史を伝えてくれる生き証人となるわけです。僕たち部員も今の西高の歴史をこの西高新聞を通して後世に残したいところです。

どうでしたか、少しでも新聞部に興味を持って頂けましたか。新聞部は今、総勢十一人で楽しんで部活動をしています。和気あいあいとしていて、互いに気兼ねすることのない居心地の良い部活です。また、ここで紹介したことの他にも、部員で決めた場所へ取材しに行く取材旅行、一宮七夕まつりの街頭アンケート調査（今年はコロナでできませんでした）など魅力的なイベントがたくさんあります。

この記事を読んで「新聞部って楽しそう！」と思った方は是非部室まで来て下さい！僕たちはいつでも待っています。（竹村）

後期生徒会

①学年・組・名前
②マイブーム
③好きな本
④西高生に一言

《会長》
①二年一組　池田　りりい
②音楽を聴くのが好きです。
③ハリーポッター関連
④体調にはくれぐれも気を付けて毎日を過ごしていきましょう！

《副会長》
①二年三組　稲富　拓慎
②毎朝野菜生活を飲む
③ナナメの夕暮れ
④できる限り頑張ります。

《書記》
①二年三組　米谷　駿希
②ゲーム
③模倣犯
④よろしくお願いします。

《会計》
①二年六組　佐田　雅弥
②みかん
③呪術廻戦
④感染症が流行している中だからこそ行事を、学校生活を全力で楽しみましょう。

MY SCHOOL DAYS

自由と責任

神谷　潤　先生

僕の出身高校は豊橋市にあります。中学3年生の担任の先生から「受かる確率は1％」だぞと言われ、逆にやる気を出して勉強に取り組むことが出来ました。担任からその言葉を言われたときは「このやろう！（怒）」と思っていましたが、今思えば担任の掌の上で転がされていたのかなぁ～とも思います。

自分自身が変わると、同じ言葉・出来事・記憶でも違った意味を持つようになることはよくあることです。公民という教科を教えるようになって、多様な価値観という言葉に接する機会が増えましたが、今の自分の価値観だけで物事を判断することは常に気を付けなければならないなと感じます。

そんなこんなで何とか入学できた高校でしたが、一宮西高校とは真逆ともいえる校風で、良く言えば自由主義な、悪く言えば夜警国家的な学校でした。補習も3年生以外はなかったですし、校則も厳しくなく、部活も生徒主体で行われていました。たとえば、硬式テニス部では自分たちで練習日程やメニューを考え、合宿の計画まで立てていました（1年生の時に合宿がなかったので、それなら自分たちで企画して自己責任で行こう！となりました）。当時はそれが当たり前で、何も感じなかったですが、尾張地区で7年間過ごした今思うと、なかなか珍しい学校だったのかな？と感じています。

簡単に自分の高校生活を振り返ってみると、1年生の時はひたすら部活動や習い事（日本拳法という武道を習っていました）やバンドに打ち込んだ記憶しかありません。現在のような部活動のガイドラインなども（恐らく）なかった時代で、週7日練習や休日午前・午後両方練習なども当たり前でした。しかし、これは嫌々やっていたというわけではなく、生徒自身が予定を組んで、自主的に取り組んでいたものです。硬式テニスという競技は、小学校や中学校からの経験者（ジュニア）が圧倒的に有利で、高校から始めた自分のような初心者が勝つには相当な努力が必要でした。当時は、顧問の先生がいないと活動してはいけないなどの規制もなく（もしかしたらあったかもしれません）、やる気がある部員にとってはやりたいときにいつでもできるという非常に恵まれた環境にありました。

進路についてもあまり深く考えておらず、数学が好きだったので理系に行こうと考えていたのですが、理系に行くと地学を学べないことを知って文系に行くことになりました（結局人数不足で地学は開講されず、非常にショックを受けたのを覚えています）。仮に理系に進んでいたらどんな進路を歩めたのかな～と想像することもありましたが、自分が選んだ選択なので自分が責任を負うしかないと考え、少しずつ将来のことを考えるようになりました。

2年生でも相変わらず部活動中心の生活でした。よく言えば目の前のことに全力で取り組んでいましたが、悪く言えば後先のことをよく考えていませんでした。学校の成績はずっと悪かったのですが、不安や焦りといった気持ちもありませんでした。進路については、バンドをやっていたこともあって、Hard Rock Caféみたいな店を経営したいと漠然と考えていましたが、そのために何かをしているわけではなく、親などから起業などの厳しさを教えてもらいすぐに諦めてしまう程度のものでした。

高校生活の転機は2年生の秋でした。部活の新人戦があり、団体戦で県大会に出場できず、涙をのみました。部活動に多くのエネルギーを注いでいた自分にとって非常にショックで、なんのために今まで頑張ってきたのだろうという気持ちになり、大好きだった部活動をやめる決心をしました（今考えると、ボールやストリングの状態や、練習方法など様々な要因があり、技術的なことだけでなく、環境的な面のこともっと考えるべきだったと後悔しています）。しばらくの間はもぬけの殻状態だったのですが、部活動の時間がそのままフリーになったことから、冬ごろから勉強を本格的に始め、成績もよくなってくると、勉強にやりがいを見出すようになりました。それまでサボっていたこともあり、努力がすぐに結果に現れてくれることが単純にうれしかったんだと思います。

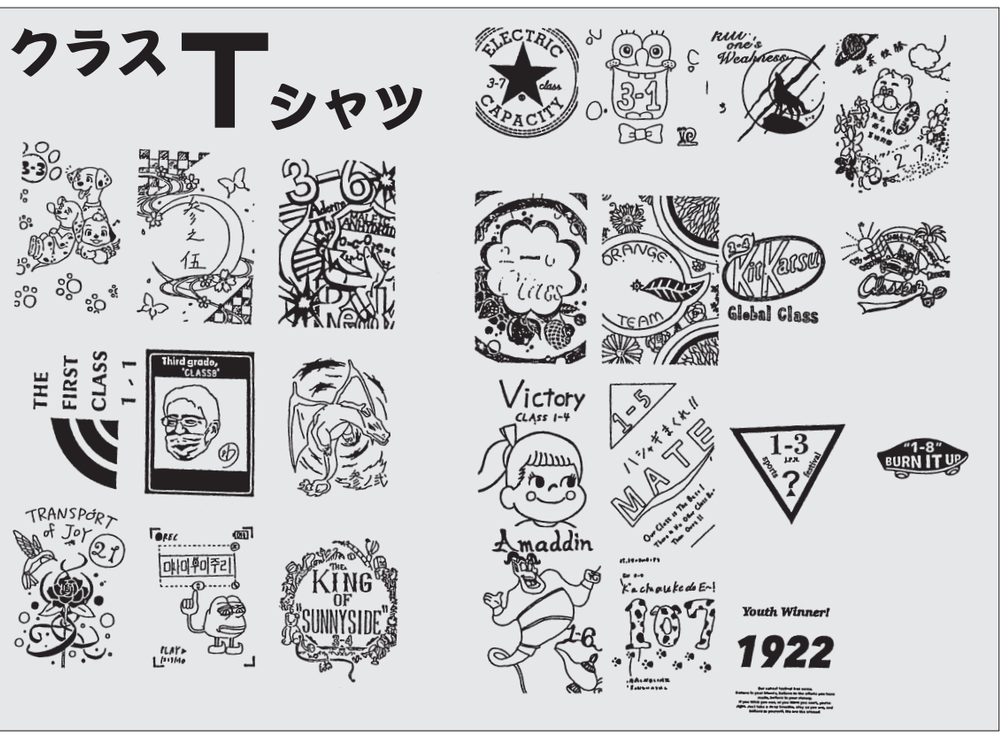
3年生は部活の時間がそのまま勉強の時間に代わるような生活で、なにか書けるようなイベントはあまりなかったように思います。一つ書けるとしたら文化祭に向けてバンド活動は続けていたことくらいです。部活動やバンド活動で培った友人関係は、今でもテニスをやったり、オンライン飲み会をやったりと続いており、本当にやってよかったな～と思います。高校生活の中で得た一番の財産は何かと問われたら、こうした人間関係や共に努力をしたという経験だといえます。

残念ながら、大学受験は第一志望に落ちてしまったため、浪人することになり、そこで初めてしっかりと自分の進路と向き合ったような気がします。そこでも結局将来やりたいことが決まることはなかったのですが、様々な選択肢を残しつつ、いろいろなことにチャレンジできる環境が整った大学に行こうというそれまでよりもはっきりとした目的意識をもって大学や学部を選ぶことが出来ました（現役時代は自分の限界に挑戦するという理由だけで偏差値の高さが大学選びの基準でした）。

振り返ってみると、僕の高校生活は自由と責任が問われた3年間だったのかなと思います。基本的にすべてのことを自分で考える必要があったからこそ、その結果についてもしっかりと受け入れ、次に生かしていける環境があったとおもいます。一宮西高校は補習などの学習指導、教員がしっかりとみてくれる部活動、面談や講話などの進路指導といった非常に手厚いサポートがあり恵まれた環境にあると思います。これらの環境をうまく活用することは大切ですが、その恵まれた環境に依存しすぎないように注意してください。こうした環境も、ともすれば「やってくれるのが当たり前」という考えや、「自分でやらなくても誰かがやってくれる」などの非主体的な考えを生み出してしまう危険性もあります。社会に出てから必要とされるのは「自ら問いを立て、考え、判断していくこと」です。

最後になりますが、今自分は高校で公民の教員をやっています。そして、自分が高校時代に最も苦手だった教科は社会科でした。高校時代の自分が予言者かなんかに「お前将来公民の教員になるぞ」と言われたら、100％信じていなかったと思います。本当に人生というのはどうなるかわからないものですので、自分の可能性を狭めずに、様々な可能性から自分の未来を創っていってください。

クラスTシャツ



今年の西高祭も各クラスがデザインしたTシャツを着用して行われた。これらは今年のTシャツのデザインである。どこか見覚えのあるようなキャラクターやロゴもあれば、独創性に溢れたデザインもあった。今年の西高祭はコロナ禍という状況のなかで文化祭が開催されなかったなど例年とは全く異なっていた。しかし、体育祭ではこれらのTシャツを着て例年通り全力で楽しむ西高生の姿が見られた。（尾嵜）

赤い羽根共同募金

十一月十四日、赤い羽根共同募金の受け渡しが校長室で行われました。おこしになったのは、一宮市共同募金委員会の副会長、森重幸さんです。今回の募金で集まった金額は二万六千二百十八円で、昨年の分と合わせて計三万二千六十三円が生徒会執行部によって渡されました。今回集められた募金は、地域の災害復興や日常生活に困難を抱える家庭への支援などに使われます。（岡村）

編集後記

数学分かりません。文系なのに難しすぎです。（木村）

最近『プロジェクトセカイ』にどハマりしています。COSMo@暴走Pのファンです。（尾嵜）

今回初めて記事を書いたのでぜひ読んでください。（小島）

一年越しにマイクラの沼にハマって勉強できません。（山田）

空気が乾燥してきましたね。（勝野）

寒くなってきましたが、水分補給をしましょう。（岡村）

好きなアニメの7期が発表されました。ちなみに世界領です。（池田）

最近、久しぶりにCDを買いましたが、やはり高いですね。（大竹）

勉強頑張りたい。（堀井）

今年のサンマは高いうえに小さくて残念。（竹村）

最近、日向坂をテレビで見る機会が増えてますね。推すしかない！（石原）

『西高新聞』を一緒に作りませんか！特に、1年生を大歓迎。兼部でもOK。